

平成 30 年度 鳴門教育大学

# グローバル教員養成プログラム報告書

日本語教育実習

<チャンカセーム・ラチャパット大学>

(タイ王国)

鳴門教育大学

# 目 次

タイ王国

日本語教育実習

〈チャンカセーム・ラチャパット大学〉

実施報告書 田中 大輝, 廣田 知子, 大西 紀子 .....	1
参加報告書 山本 和美 .....	13
参加報告書 井上 育美 .....	27



平成30年度 鳴門教育大学  
グローバル教員養成プログラム 実施報告書

日本語教育実習  
＜チャンカセーム・ラチャパット大学＞  
(タイ王国)

出張者所属・氏名

教員（2名）	：	言語系コース（国語）	田中 大輝
	：	言語系コース（国語）	廣田 知子
職員（1名）	：	学生課国際交流係	大西 紀子
院生（2名）	：	言語系コース（国語）	山本 和美（M1）
	：	言語系コース（英語）	井上 育美（M1）
用務地	：	タイ王国	
用務先	：	チャンカセーム・ラチャパット大学	
出張期間	：	平成31年3月4日（月）～3月16日（土）	

## 1. はじめに

本研修では、主に以下の(1)-(3)の3つの活動を通して、参加者にグローバルな視点を持った教員としての資質・能力を身に付けさせることを目的とした。

### (1) 【研修活動[1]】

チャンカセーム・ラチャパット大学で学ぶ学生との交流を通して、タイの高等教育機関で学ぶ学習者の学習動機や日本語・日本文化についての考えを知る。また、タイの文化に触れ、日本の文化との違いを体験する。

### (2) 【研修活動[2]】

チャンカセーム・ラチャパット大学で行われている日本語の授業を見学することで、タイの高等教育機関における日本語教育のあり方を学ぶ。

### (3) 【研修活動[3]】

チャンカセーム・ラチャパット大学で日本語の授業を行い、学習者の日本語能力・モチベーションの向上、および、日本文化の理解促進に貢献する。また、より良い日本語指導の実施のために、当該授業について、チャンカセーム・ラチャパット大学および本学の関係者と意見交換を行う。

## 2. 研修計画・内容

### 2-1 本研修の参加者

チャンカセーム・ラチャパット大学で行う研修は今回が初めてであり、両大学の今後の交流のあり方について協議を行う必要もあることから、本研修に帯同するのは、日本語教育分野の教員2名と国際交流係の職員1名とした。学生の選抜方針は(5)のとおりである。

### (4) 本研修の参加者

(教員2名)	: 言語系コース(国語)	田中 大輝
	言語系コース(国語)	廣田 知子
(職員1名)	: 学生課国際交流係	大西 紀子
(院生2名)	: 言語系コース(国語)	山本 和美 (M1)
	言語系コース(英語)	井上 育美 (M1)

### (5) 本研修の参加者(学生)の選抜方針

- a. 大学院開講科目の「日本語教育実習」の一環として派遣されるため、日本語教育に関する豊富な知識・経験を有していること。
- b. 今回の海外研修の目的を十分に理解し、グローバルな視点を持った教員になるために、自らの資質・能力を高めたいという目的意識が明確であること。

## 2-2 本調査研究の日程

### (6) 本研修の日程（教職員）

日順	月日(曜日)	業務地	業務内容
1	3/4(月)	【田中】 徳島→羽田 羽田→バンコク	移動 JL454 (徳島発 09:05→羽田着 10:15) 移動 JL031 (羽田発 11:20→バンコク(スワンナプーム)着 16:20) 移動 ホテルへ
2	3/5(火)	バンコク	11:30-14:30 「Japanese for Guide 1」 (3年生対象) 授業見学 (②)
3	3/6(水)	バンコク	09:00-11:00 1年生との交流会に参加 (③) 13:30-16:00 2年生との交流会に参加 (④) 17:00-18:00 学長表敬訪問 (⑤) 18:00-20:00 会食 (⑥)
4	3/7(木)	バンコク	11:30-14:00 「Japanese Writing 2」 (2年生対象) 授業見学 (⑦) 14:30-17:00 「Japanese Interpretation 1」 (3年生対象) 授業見学 (⑧)
5	3/8(金)	バンコク	09:00-11:30 「Japanese Studies」 (1年生対象) 授業見学 (⑨)
6	3/9(土)	【廣田】 徳島→羽田 【廣田・大西】 羽田→バンコク	移動 JL454 (徳島発 09:05→羽田着 10:15) 移動 JL031 (羽田発 11:20→バンコク(スワンナプーム)着 16:20) 移動 ホテルへ
7	3/10(日)	【田中】 バンコク→羽田 羽田→徳島	移動 JL032 (バンコク(スワンナプーム)発 09:55→羽田着 17:30) 移動 JL465 (羽田発 19:40→徳島着 20:55)
8	3/11(月)	【廣田・大西】 バンコク	09:00-11:30 「Japanese Listening and Speaking 4」 (2年生対象) における本学学生の実習授業を見学 (⑩)
9	3/12(火)	バンコク	12:00-14:30 「Japanese Listening and Speaking 2」 (1年生対象) における本学学生の実習授業を見学 (⑪) 17:00-18:00 国際課との打ち合わせに参加 (⑫) 18:00-20:00 会食 (⑬)
10	3/13(水)	【廣田】 アユタヤ 【大西】 バンコク→羽田 羽田→徳島	07:00-17:00 アユタヤ日帰りツアーに参加 (⑭) 移動 JL032 (バンコク(スワンナプーム)発 09:55→羽田着 17:30) 移動 JL465 (羽田発 19:40→徳島着 20:55)
11	3/14(木)	【廣田】 バンコク	11:30-14:30 「Japanese Writing 2」 (2年生対象) における本学学生の実習授業を見学 (⑮) 15:00-17:00 「Japanese for Tourism 1」 (観光学科の学生対象) における本学学生の実習授業を見学 (⑯)

12	3/15(金)	バンコク	13:00-14:00 修了式 14:00-16:00 実習授業の振り返り (17)
13	3/16(土)	【廣田】 バンコク→羽田 羽田→徳島	移動 JL032 (バンコク(スワンナプーム)発 09:55→羽田着 17:30) 移動 JL465 (羽田発 19:40→徳島着 20:55)

(7) 本研修の日程 (学生)

日順	月日(曜日)	業務地	業務内容
1	3/4(月)	徳島→関空 関空→バンコク	移動 高速バス 移動 XJ611 (関空発 23:45→バンコク(ドンムアン)着 04:00) 移動 ホテルへ
2	3/5(火)	バンコク	10:30-11:00 オリエンテーション・大学案内 (1) 11:30-14:30 「Japanese for Guide 1」 (3年生対象) 授業見学 (2)
3	3/6(水)	バンコク	09:00-11:00 1年生との交流会に参加 (3) 13:30-16:00 2年生との交流会に参加 (4) 17:00-18:00 学長表敬訪問 (5) 18:00-20:00 会食 (6)
4	3/7(木)	バンコク	11:30-14:00 「Japanese Writing 2」 (2年生対象) 授業見学 (7) 14:30-17:00 「Japanese Interpretation 1」 (3年生対象) 授業見学 (8)
5	3/8(金)	バンコク	09:00-11:30 「Japanese Studies」 (1年生対象) 授業見学 (9)
6	3/9(土)	バンコク	
7	3/10(日)	バンコク	
8	3/11(月)	バンコク	09:00-11:30 「Japanese Listening and Speaking 4」 (2年生対象) において実習授業を実施 (10)
9	3/12(火)	バンコク	12:00-14:30 「Japanese Listening and Speaking 2」 (1年生対象) において実習授業を実施 (11)
10	3/13(水)	アユタヤ	07:00-17:00 アユタヤ日帰りツアーに参加 (14)
11	3/14(木)	バンコク	11:30-14:30 「Japanese Writing 2」 (2年生対象) において実習授業を実施 (15) 15:00-17:00 「Japanese for Tourism 1」 (観光学科の学生対象) において実習授業を実施 (16)
12	3/15(金)	バンコク→関空	13:00-14:00 修了式 14:00-16:00 実習授業の振り返り (17) 移動 XW112 (バンコク(ドンムアン)発 23:40→関空着 07:10)
13	3/16(土)	関空→徳島	移動 高速バス

## 2-3 本研修の内容とその成果

### 2-3-1 【研修活動[1]】について

#### (1) 【研修活動[1]】 (再掲)

チャンカセーム・ラチャパット大学で学ぶ学生との交流を通して、タイの高等教育機関で学ぶ学習者の学習動機や日本語・日本文化についての考えを知る。また、タイの文化に触れ、日本の文化との違いを体験する。

#### (8) 対象となった活動

	日付	場所	学生	活動
①	3/5(火)	チャンカセーム・ラチャパット大学	3年生	オリエンテーション・大学案内
③	3/6(水)	チャンカセーム・ラチャパット大学	1年生	交流会
④	3/6(水)	チャンカセーム・ラチャパット大学	2年生	交流会
⑭	3/13(水)	アユタヤ	3年生	アユタヤ日帰りツアー

①では、本学の実習生の泊まるホテルの前までビジネス日本語学科の3年生(2名)が迎えに来てくださり、大学までの道、そして、大学の南門から人文社会学部棟までの道を(途中、学長ビル、グラウンド、プール、池、学生食堂などを經由して)案内して下さった。これにより、実習生は自分たちだけでホテルと大学を行き来することができるようになったとともに、道中の自由会話を通して、ビジネス日本語学科の3年生がどのくらいの日本語能力を有するのかを知ることができた。

③では、まず、ビジネス日本語学科の1年生(19名)が7つのグループに分かれ、タイの民族玩具、タイ人が信じているもの、タイの料理、タイの衣装、タイの挨拶、タイの行事、タイのお祭り、についてのプレゼンをして下さった。タイには「水曜日に髪を切るのは良くない」という独特なタブーがあったり、「9 (gao)」は「発展・進歩 (kâaw)」と発音が似ているから縁起が良い」のように日本や他の国と通じる考え方があったりし、たいへん興味深かった。その後、本学の実習生が「徳島県・鳴門市の紹介」および「日本文化の紹介」を行った。

④では、まず、ビジネス日本語学科の2年生(15名)が、演劇形式で「morn som pha」(タイ式のハンカチ落とし)、「ゲーギンハーン」(蛇がしっぽを食べる)、「ダイノーサオモーン」(タイ式のだるまさんが転んだ)、「ティー」(タイ式の鬼ごっこ)というタイの伝統的な遊びを紹介して下さった。2年生たちによると、これらの遊びをするのはだいたい小学生までのようだったが、知力や忍耐力、さらには観察力や視力まで鍛えることができる、と説明していたのが印象的であった。その後、本学の実習生が「徳島県・鳴門市の紹介」および「日本文化の紹介」を行った。

(本学の実習生による「徳島県・鳴門市の紹介」および「日本文化の紹介」の詳細については、学生の参加報告書を参照してほしい。)



⑭では、「Japanese for Guide 1」（「ガイドの日本語 1」）の授業（②）の試験を兼ねたアユタヤへの日帰りツアーに参加した。アユタヤまでは貸し切りバスで片道 2 時間ほどかかる。毎年行っているプロジェクトのようで、今年の参加者は 3 年生 33 名であった。引率教員は授業担当のサワンニー先生と井尻先生の 2 名で、鳴門教育大学の井上、山本、廣田の 3 名が日本からの本当の観光客としてツアーに同行した。

学生は 9 つ（以下を参照）に分けられた 18 種類の説明スクリプトをあらかじめ暗記して行くことを課せられていた。当日、くじを引いて、当たった箇所について拡声器を使って本格的なガイドさながらみんなの前に立って説明する。日帰りツアーというと、授業を離れてすっかり楽しめそうだが、学生は自分の順番が来るまで気が気ではない。みんなの前に立つと、覚えてきた内容を忘れてしまうほどの緊張感を漂わせている学生もいた。どうしても思い出せない時は、サワンニー先生の配慮で、もう一回くじを引かせてもらっていた。厳しく採点に当たっているサワンニー先生だが、「チャンスを与えます。」という言葉に、ほっと胸をなでおろした学生もいたに違いない。学生への愛情と信頼が垣間見えた瞬間であった。

9 つに分けられた説明スクリプトの項目は、以下のとおりである。

1. アユタヤの紹介①（意味・位置・面積）
2. アユタヤの紹介②（県境・人口）
3. ツアーの予定
4. バーンパイン宮殿①（由来，サパーカーンラーチャプラユーン集会場，ヘーンモンティアンテーワラート塔）
5. バーンパイン宮殿②（アイサワンティッパヤアート，ワローパートピマーン，ウッタヤーンプーミサティアン）
6. バーンパイン宮殿③（ウイトウンタッサナー，ウェーハートチャムルーン，スタンナー・クマーラーラット王妃の記念碑，サオワパークナーラーラット王妃とラーマ 5 世の王子と 1 人の王女の記念碑）
7. 日本人村，水上マーケット・料理（今回，日本人村には行かなかった。）
8. デザート・お土産
9. ヤイチャイモンコン寺院（ヤイチャイモンコン寺院の説明，感想，感謝，別れの挨拶）

朝早い出発であったので，バスの中で朝食代わりのハンバーガーが配られた。食後のごみの処理も学生がてきぱきと行っていて，日本語以外のマナー教育も徹底されていた。

要所要所に，写真や地図を配したパネルが加えられて，非常に懇切丁寧なわかりやすい説明を聞くことができた。日ごろの練習のたまものだと思われる。

## 2-3-2 【研修活動[2]】について

### (2) 【研修活動[2]】 (再掲)

チャンカセーム・ラチャパット大学で行われている日本語の授業を見学することで、タイの高等教育機関における日本語教育のあり方を学ぶ。

### (9) 対象となった授業

	日付	授業名	対象学年	授業者
②	3/5(火)	Japanese for Guide 1 (ガイドの日本語 1)	3 年生	サワニー先生 (チャンカセーム・ラチャパット大学ビジネス日本語学科)
⑦	3/7(木)	Japanese Writing 2 (日本語作文 2)	2 年生	井尻先生 (チャンカセーム・ラチャパット大学ビジネス日本語学科)
⑧	3/7(木)	Japanese Interpretation 1 (通訳の日本語 1)	3 年生	タワット先生 (チャンカセーム・ラチャパット大学ビジネス日本語学科)
⑨	3/8(金)	Japanese Studies (日本事情)	1 年生	マーリン先生 (チャンカセーム・ラチャパット大学ビジネス日本語学科)

②では、3 年生 (37 名) が 5 つのグループに分かれ、プラチュワップキーリーカン、ウボンラーチャタニー、チェンマイ、カンチャナブリー、チャチュンサオの各地域の一日観光ツアーのプレゼンテーションをしてくださった。どのグループも、ホテル (あるいは駅) 出発からホテル (あるいは駅) 帰着までの計画が綿密に練られており、観光名所や食事の紹介にも様々な工夫が見られた。翌週には、アユタヤ日帰りツアー (⑭) で、我々に対して実際にガイドを行うことが予定されていたことから、このプレゼンテーションに対してもリアリティをもって準備できていることが窺えた。

⑦では、「バンコク五行歌の会」の幹事でいらっしゃる杉山佳久先生、および、同会のメンバーでノンタブリー県内の高校で日本語を教えていらっしゃる内野里美先生をゲストに交えて「五行歌ワークショップ」が行われた。まず、杉山先生による日本の詩歌についての説明、および、心理学的な側面を交えた感情についての講義があり、その後、五行歌についての説明、作歌、そして歌会と進んだ。五行歌に触れるのは初めてという学生が大半だったと思われるが、皆、試行錯誤しながらも、素直な気持ちを表現できていたり、詩的な作品を作り上げることができていたりした。日本語教育で詩歌と言えば、季語などを通して日本の文化を学ぶ、また、拍感覚を意識させるなどの理由で、俳句や短歌が取り上げられることが多いと思われるが、今回のワークショップのように、比較的自由に作ることができる五行歌を題材にすることによって、日本語の産出 (日本語による詩歌作成) に対する学習者のハードルを下げることができるかもしれない。

⑧では、3年生(29名)を対象として、通訳の重要な技術であるリピーティングとクイック・レスポンスの復習、そして、数字の聞き取りの活動が行われた。数字の聞き取りは、学生が宿題として事前に提出していた素材(ニュースやアニメから取ってきた生の日本語素材)が使われており、皆、競って聞き取りに熱中していた。授業の後、担当者であるタワット先生が我々に意見を求めてくださったので、急遽、当該授業に対する意見交換会を開催することができた。そこでは、授業を見学するだけでは見えてこなかった授業者の意図を知ることができたり、実習生の一人である井上が提示した、英語教育の観点からのアイデアをタワット先生に喜んでいただけたたりし、双方にとってたいへん有意義な時間となった。

⑨では、1年生(18名)を対象として、日本のスポーツ(相撲、柔道、空手、剣道、弓道)、伝統芸能(能、狂言、歌舞伎、文楽)、楽器(琴、尺八、鼓、三味線、和太鼓)の講義が行われた。相撲や能、三味線の項目では動画を用いて視覚的にイメージしやすい工夫がなされていたり、学生の頭が疲れてきた頃には皆で四股を踏んで授業の雰囲気を変えるなど、学生を退屈させない工夫が多々見られた。また、最後に茶道の動画を見せてくださったことにより、1年生にとって、交流会(③)の復習(井上が紹介した茶道の補足)となり、ありがたかった。

(②、⑦、⑧、⑨の各授業の詳細については、学生の参加報告書を参照してほしい。)

### 2-3-3 【研修活動③】について

#### (3) 【研修活動③】(再掲)

チャンカセーム・ラチャパット大学で日本語の授業を行い、学習者の日本語能力・モチベーションの向上、および、日本文化の理解促進に貢献する。また、より良い日本語指導の実施のために、当該授業について、チャンカセーム・ラチャパット大学および本学の関係者と意見交換を行う。

#### (10) 対象となった授業

	日付	授業名	対象学年	授業者
⑩	3/11(月)	Japanese Listening and Speaking 4 (聴解会話 4)	2年生	井上育美 (鳴門教育大学大学院生)
⑪	3/12(火)	Japanese Listening and Speaking 2 (聴解会話 2)	1年生	山本和美 (鳴門教育大学大学院生)
⑮	3/14(木)	Japanese Writing 2 (日本語作文 2)	2年生	山本和美 (鳴門教育大学大学院生)
⑯	3/14(木)	Japanese for Tourism 1 (観光の日本語 1)	観光学科	井上育美 (鳴門教育大学大学院生)

(11) 実習授業全体の振り返り

	日付	参加者
⑰	3/15(金)	【鳴門教育大学】 廣田，山本，井上 【チャンカセーム・ラチャパット大学】 タワット先生，井尻先生，サワンニー先生，ニッチャラー先生， マーリン先生

⑰では、実習授業全体の振り返りを行った。前半の個々の授業に関する振り返りは廣田が司会進行を行った。後半は、タワット先生が進行を務めてくださり、このプログラム全体について気付いたことを述べあった。(⑩、⑪、⑮、⑯の各授業の詳細、および、⑰の実習生側の振り返りについては、山本・井上それぞれの参加報告書を参照してほしい。)

全部で4クラスあった実習授業を、時系列に沿って丁寧に見直していった。まず、⑩について、授業者の井上は、「スケジュール上、準備を行うのが大変で、休憩を取らずに2時間半という長い授業の組み立てに戸惑ったが、実際に実施してみるとあつという間に過ぎ去り、ウォームアップを楽しむこともできたが初めて顔を合わせる学生たちの反応に臨機応変にやるには、それなりのむずかしさがあった」という感想を述べた。実習授業を見学して下さった先生からは、「学生の名前を言って質問に答えていたところは、一人一人のことを見ていることを示すのでとても良かった」というご意見をいただいた。また、「一行一行読むことを大切にしていたので、できない人はできないなりに、できる人はできる人で、それぞれ満足感を得られる方法であることも良かった」ということであつた。惜しかった点は、「初級学習者としては難しい文型や語彙を選んでしまっているところがあり、学生の理解が及ばなかったところもあつただろう」ということである。

次に、⑪について、授業者の山本自身は、「学生把握ができておらず、レベル差のあるクラスに対する会話の授業でうまく対処できなかった」と反省していた。しかし、井尻先生からは、「話す授業になり達成感もあつたので、未習の学生も本当に楽しんでいてあまり気にする必要もない」とお褒めのことばもいただいた。井上からは、山本は授業中に学生の名前を聞いて写真を撮るという丁寧な作業を行ったが、一人一人と時間を費やしてしまう分、他の学生がざわざわしてしまったので、そこは少し改善の余地があるという感想が出ていた。

3/14(木)には、山本、井上それぞれの実習授業の二回目が行われた。まず、⑮について、授業者の山本からの大きな反省点としては、タイマーの操作ミスがあり、日本のお金とタイのお金の比較の文をグループで考えるところで大幅に時間を取ってしまい、最後の作文をスキップせざるを得なかったことが挙げられた。また、タワット先生の「Japanese Interpretation 1」(「通訳の日本語1」)の授業(⑧)の手法にたく感動したので、早速それを取り入れて、23題の比較文を聞かせて要点をつかむということを試みたが、うまくいかなかった。井尻先生からは、作文の授業を実習授業としてやることの難しさが述べられた。作文は最終的には個人作業となるので、一人一人きちんと書けているかどうかのチェックが欠かせないが、

今回はそれがなかった。また、指示が明確ではなかったのも、今何をやったらいいのかというものの把握が学生もできていなかったと思われる。一方、井上からは、名札をうまく使っていたことが良かった点として挙げられた。グループのレベル差があったので授業はやりにくかった点があったと思うが、一回限りの授業で一人一人の学生の力量を把握してグループ分けに生かすというのは、非常にハードルが高く、教育実習で作文授業を担当するという点に関しては、課題が山積みであることを感じさせられた。

次に、⑯について、授業者の井上からは、伝言ゲームなどゲームを取り入れたことで楽しんでやれたが、話すスピードが少し速くなってしまったという反省点が挙げられた。ニッチャラー先生からは、未習語が多く、最初は学生の反応がなかったので心配であったが、最後は笑顔が見られたので良かったという感想が出た。文法用語の「名詞」などは、「Noun」というように英語を使って対応してもいいと言われたが、媒介語に関しては全く使用するという発想がなかったので、盲点でもあった。最後に「まとめ」をきっちりやったのはとても好評であった。

個々の授業に関しては、上記のとおりであるが、スケジュールも含めて実習全体についての意見交換も行われた。実習生からは、教案を書く際に、学生のレベルの情報がたくさん必要という要求も出されたが、ビジネス日本語学科の先生方からは、学習歴や能力試験の結果といった文字情報よりも、授業中にもっと学生に近づいてその時々で判断していくことも大切だというご意見をいただいた。どのような情報が何のために必要か、そしてその情報をどう授業に生かしていくかは、今後の課題として考慮しなければならない。

また、今回はスケジュールの都合でかなわなかったが、理想的には、実際に見学させていただいたクラスで実習させていただく方がいいということが実習生から強く要望された。また、チャンカセーム・ラチャパット大学は1コマが2時間半と長丁場なので、1コマを前半と後半で分担するというやり方もできたかもしれないという意見も出された。

実習期間としては、できれば二週間、少なくとも10日間程度は必要で、土、日に観光案内を通じて学生と交流するというのもいいという提案がなされた。特に今回はホームステイがなかったので、学生同士、一緒に街歩きをする時間を設ければ、お互いに有意義な時間が過ごせたかもしれない。実習時期としては、3月か9月が理想的だが、9月の場合は下旬に試験があるので、中旬までに終えてほしいというリクエストが出された。

鳴門教育大学側からは、本学の留学生が実習生として参加することが可能かどうかを伺った。これについては、留学生と日本人のペアで2名ということなら受け入れていただけるとのことであった。

### 3. 最後に

本学関係者がチャンカセーム・ラチャパット大学を訪れるのは今回が初めてであることから、以下のように、研修中の様々な機会に、チャンカセーム・ラチャパット大学の学長，副学長，学部長，国際交流担当の先生，そして，ビジネス日本語学科の先生方とお話をする機会をいただくことができ、今後の研修や交流のあり方を検討することができた。

#### (12) チャンカセーム・ラチャパット大学の先生方との打ち合わせ

	日付	参加者	内容
⑤	3/6(水)	【鳴門教育大学】 田中，山本，井上 【チャンカセーム・ラチャパット大学】 スマーリー学長，ラーシェン副学長， オーラン先生（国際交流担当）， タワット先生，井尻先生，サワンニー先生， ニッチャラー先生，マーリン先生	学長表敬訪問
⑥	3/6(水)	【鳴門教育大学】 田中，山本，井上 【チャンカセーム・ラチャパット大学】 ラーシェン副学長，タワット先生，井尻先生， サワンニー先生，ニッチャラー先生，マーリン先生	会食
⑫	3/12(火)	【鳴門教育大学】 廣田，大西 【チャンカセーム・ラチャパット大学】 スマーリー学長，ラーシェン副学長， プラサート人文社会学部長，オーラン先生， タワット先生，井尻先生，サワンニー先生， ニッチャラー先生，マーリン先生	国際課との打ち合わせ
⑬	3/12(火)	【鳴門教育大学】 廣田，大西 【チャンカセーム・ラチャパット大学】 ラーシェン副学長，プラサート人文社会学部長， オーラン先生，タワット先生，井尻先生	会食

本報告書を締めくくるにあたって、本学実習生の受け入れを快く引き受けてくださった、スマーリー学長をはじめとする、チャンカセーム・ラチャパット大学のすべての関係者の方々に厚く御礼申し上げたい。特に、滞在中だけでなく渡航前から私たちのことを気にかけてくださり、タイでの生活や実習に向けて様々な情報・アドバイスをくださった井尻史子先生、そして、2017年8月に本学を訪れてくださって以来、本学とチャンカセーム・ラチャパット大学の架け橋として、本研修の実現にご尽力くださったタワット先生には、心より感謝申し

上げる。今回の研修をきっかけとして、両大学の交流がますます深まることを願ってやまない。

平成30年度 鳴門教育大学  
グローバル教員養成プログラム 参加報告書

日本語教育実習  
＜チャンカセーム・ラチャパット大学＞  
(タイ王国)

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科  
教科・領域教育専攻 言語系コース (国語)  
学籍番号 18811131  
氏 名 山本 和美



1. 大学機関名

チャンカセーム・ラチャパット大学 人文社会学部 ビジネス日本語学科  
Business Japanese Program Faculty of Humanities and Social Sciences  
Chandrakasem Rajabhat University

2. 所在地

タイ王国 バンコク都 ラチャダー  
39/1 Ratchadaphisek Rd Chatuchak Bangkok 10900



3. 研修期間

2019年3月4日（月）～16日（土）  
（現地滞在は3月5日（火）～15日（金）の11日間）

4. チャンカセーム・ラチャパット大学（以下 CRU と表記）選択の理由

平成30年度グローバル教員養成プログラム日本語教育実習の実習先にはいくつかの選択肢が用意されていたが、私が CRU を選んだ理由は以下の2点である。

【実習授業の学習者が高等教育日本語専攻であること】

日本語が大学進学(進路決定)の目的であることは、日本に何らかの興味関心があり、就職についても日本語を使った仕事を目指していると考えられる。

【選択科目や第二外国語ではなく、主専攻の日本語教育を見学したい】

バンコクには観光名所や日系企業があり、日本語を使う機会が多い。日系企業への就職も視野に入れた教育が行われていることを期待した。（知識の修得と日本語の運用）

5. タイに行くまでの事前準備について

2018年4月 オリエンテーション 日本語教育実習履修届提出

2018年4月～2019年2月

学内授業見学 「日本語補講 E」（毎週水曜1限：青木先生）

「日本語補講 D」（毎週金曜1限：妹尾先生）11月～12月

学外授業見学 とくしま国際戦略センター日本語教室（毎月1回）

2018年7月10日 平成30年度短期交換留学説明会

及び「海外留学に於ける事故例と安全対策」解説セミナー参加

2018年8月 実習先決定 タイ王国に関する情報収集開始

2018年後期 「日本事情・日本文化」（廣田先生）の授業を履修

2018年12月 日程調整開始

2018年1月31日 「日本事情・日本文化」において実習に向けた模擬授業を実施

2019年2月 実習日程決定 航空券・宿泊先手配

ビジネス日本語学科の井尻史子先生とメールでのやり取り開始

(授業以外の注意点等も含む)

実習内容決定 交流会・教案準備開始

鳴門教育大学に在籍しているタイ人留学生2名に

アンケートの翻訳や生活上の注意などのアドバイスを受ける

3月4日月曜日 17:00 高速鳴門出発

3月5日火曜日 4:00 バンコクドンムアン空港着

5:30 一時帰国中の鳴門教育大学タイ人留学生タナポンさんが  
空港に迎えに来てくれる

ホテルチェックイン・朝食・両替を手伝ってもらう

10:30 ビジネス日本語学科3年生のアナンタチャイさんとラッ  
タポンさんが、ホテルから大学までと大学構内の案内を  
してくれ、ビジネス日本語学科がある人文社会学棟まで  
案内してくれる

11:00 実習が始まる

## 6. タイでの日本語教育実習について

### CRUの学生との交流会

相互文化の理解促進について。今回1年生と2年生を対象に交流会を設定して  
いただいた。その中でCRUの学生はタイの紹介を、私たちは日本の紹介をした。  
CRUの学生の詳細は「グローバル教員養成プログラム実施報告書」2-3-1③④を参  
照されたい。

#### (1) プレゼンテーション流れと内容

##### **「徳島県・鳴門市の紹介」山本担当**

代表的な日本文化については、日本語専攻ではタイ人の先生から母語で多くを学ん  
でいると予想された。では、私たちは何を伝えるか。それは「徳島県鳴門市」であり、  
「鳴門教育大学」そのものであろうと思った。地図や画像、鳴門教育大学の航空写真・  
全体図などを用意し、パワーポイントを使用した。日本語だけでは伝わらないことも  
あると考え、鳴門教育大学のタイ人留学生ウォンサコンさんの協力を得てタイ語で鳴

門と鳴門教育大学の感想を1分18秒の映像にして紹介の中に入れた。「鳴門教育大学」の6文字を印象付けたと思う。

そして、CRUの学生が体験するという点で「阿波踊り」の紹介を入れた。徳島県には阿波踊りがあることが最大の強みであると思っている。

- ・日本の夏祭りとその楽しみ方の紹介。
- ・鳴門教育大学には阿波踊り部があり、活発に活動している。
- ・タイ人留学生が阿波踊り部に所属していた。その紹介は身近な話題として感じてもらえると考えた。

準備として、映像と、音楽、男性・女性それぞれ一組の浴衣を持参した。映像を見せ、踊りの説明をした。山本と浴衣を着つけた学生が阿波踊りの動作をしてみた時に、何人かの学生も体を動かしていたことが印象的であった。

### 「日本文化 茶道の紹介・体験」井上担当

茶道は代表的な日本文化の一つである。日本事情・日本文化では茶道の紹介はされるが、実際に茶筌など茶道具を使って茶をたてることや、飲む機会は少ない。また、現在、茶道の抹茶と違う抹茶飲料が広がっている。そういった背景を考え、茶道の実演と抹茶の試飲を考えた。

準備として、抹茶茶碗・茶筌・茶杓・棗・抹茶・和三盆糖干菓子を持参した。持参した道具を見せて紹介した。教室の机の上での実演だったが、学生の前で実際に茶をたてた。茶道全体の流れ、茶をたてる様子を見る。茶筌の音を聞く。ここまでは映像でみることができる。しかし、抹茶粉の香り、湯を注いだ時の香り、抹茶茶碗を手に持つ感覚、口に抹茶を含んだ感覚、味わい。これらは映像からは体験できない。茶筌で茶をたてることに学生たちは興味を示し、自分でたてた学生もいた。五感を使った体験ができたと思う。

席を立て、自由に見るように言うと、最初は遠巻きにしていた学生たちだったが徐々に近づき、茶をたてる井上の周りには覗き込むように様子を見る学生たちの顔があった。試飲が始まると、抹茶を飲む同級生の様子を見て、反応を確かめる様子があった。抹茶を試飲した多くの学生はその苦さに驚いたようだった。

バンコクには、抹茶【Matcha】と書かれた砂糖とミルクの入った抹茶飲料がある。街中でストローで飲む抹茶飲料と、作法を重んじ静寂の中でたてる茶道の抹茶が別物であることを感じたと思う。

## (2) 交流会の感想

### 3月6日水曜日 09:00-11:00 1年生との交流会

1年生の交流会では、タイの生活や文化が、画像をたくさん使いながら紹介された。私たちはこの紹介で、タイのあいさつの仕方やタブーなど、研修中の生活の注意点を学んだ。自然の素材で遊ぶ実演があった。CRUの学生の伝えようとするストラテジーは素晴らしく、全身を使って表現していた。明るいクラスで笑いが絶えない交流会になった。

私たちのプレゼンでは茶道に興味を持った学生が多く、抹茶の試飲も積極的に手をあげ、ほとんどの学生が味わったと思う。

このクラスは3月8日金曜日マーリン先生の「日本事情」の授業をタイ語で受けた。その中に「茶道」があった。相乗効果があり、より理解を深めたと思う。

### 3月6日水曜日 13:30-16:00 2年生との交流会

2年生の交流会では、CRUの学生たちは外に出て子どもの遊びを再現し、私たちに遊びの全体を見せた。歌や掛け声はタイ語でわからないものの、学生たちの様子から日本にもある子どもの遊びと共通するものを感じることができた。ことばで足りないところはいろんなものを使って伝えようとする努力の結果であった。

私たちのプレゼンでは、1年生のクラスで阿波踊りを踊ればよかったと反省したので、浴衣を着つけた学生と、1分程度だが踊った。また、「茶道」の抹茶の試飲では、先に交流を終えていた1年生がとても苦いという情報をSNSで流していたようで、はじめはあまり手が上がらなかった。それと、女子の多いクラスで先に男子が試飲したため、茶碗を回し飲むことに抵抗があったようだった。これは茶碗をティッシュで拭いたので解消された。

2年生の交流会は1年生より30分時間が長い。そこで、用意していた徳島県と鳴門市の観光パンフレットを配った。プレゼンのパワーポイントは要点を明確にするため、情報を減らしたので、載せられなかった情報、観光名所名物などが観光パンフレットに多くあり、学生たちの興味を引いた。質疑応答の形にしたところ、それまであまり積極性を見せなかった学生が手をあげ質問をするようになった。田中先生にも参加していただき、3人で質問に答えた。食と観光、東京と徳島の位置関係、交通などの質問に加え、生活費、留学について質問があった。

プレゼンの中に、タイ人留学生ウォンサコンさんによる鳴門や鳴門教育大学の感想を入れたことで、CRUの学生たちに日本への留学に興味を持たせるきっかけになったと思う。

詳しくは井上の報告書にあるが、最終日の今後に向けての話し合いの中で、CRU

の学生が日本へ留学しやすくするための CRU と鳴門教育大学の相互交流の話題が出た。それを聞いて、地方都市でしかないが「徳島県鳴門市」を紹介することは必要だったと思った。

#### アユタヤ日帰りツアー

3月13日水曜日 07:00-17:00「観光の日本語 1」のテストに同行した。（行程などの詳細は「グローバル教員養成プログラム実施報告書」2-3-1⑭を参照されたい。）

CRU の学生たちが「観光の日本語 1」の授業の日本人にアユタヤ観光ツアーを計画し、実践するテストを受ける。私たちは観光ツアーの日本人参加者役である。しかし、今回の実習で3年生との交流会がなかったこと、バンコク以外の観光地に行く機会であることなどを考えると、CRU の学生たちのテストに同行という理由以外に、CRU の先生方の温かい配慮を感じる活動であった。今回の実習に先駆けて、タワット先生から、以下の 2 点を学生たちに試させたいという要求が挙げられた。①CRU の学生たちが日本語母語話者の日本語を聞いて、理解できるか。②CRU の学生が日本語を話して日本人に伝わるか。その結果、聞いてわからなかったり、話して伝わらなかったりしたら、自分たちの日本語力はまだまだなのだと思わせてほしいと言われた。このことを考えながら参加した。

- ・学生たちの CRU の構内の様子と違う様子を見ることができた。
- ・学生たちと会話することができた。その中で、テストの発表以外に、学生たちは日本人に日本語を使う機会として、私たちは学生たちとどう会話をするか考える機会となった。
- ・タイの文化を体験することができた。徳を積むという言葉「タンブン」の説明を受け、体験した。
- ・有名な観光地アユタヤを観光することができた。
- ・宮殿内の修復工事の看板には「THAI OBAYASHI」とあり、タイの中にある日本を見つけた気持ちになった。
- ・学生からプレゼントをもらい、タイ語を教えてもらった。
- ・CRU の学生たちのコミュニケーション能力の高さに驚いた。日本語でできないところは、あらゆるストラテジーでコミュニケーションを成功させていた。
- ・学生たちのいろいろな日本語を聞くことができた。テストの日本語では、驚くほど流暢な日本語、日本語に聞こえない日本語、緊張に震える日本語などを聞いた。テスト以外では、発表が終わって解放感から出た日本語を聞くことができた。男子学生の「やったー!」「やったぜ!」「おっしゃー!」「おーし!」など、教室では聞く

ことができない日本語も多かったと思う。

サワンニー先生、井尻先生は CRU の学生のテスト以外に私たちの食事や観光に気を配ってくださった。買い物の時もそばにいてくださった。記念になる私たちの写真をたくさん撮ってくださった。最高のお土産になった。有意義で楽しい忘れたくない一日であった。

### 授業実践

CRU から以下の提案を受けて実習を行った。

実践①「会話 2」（1 年生）

内容は自由

実践②「作文 2」（2 年生）

テーマは「タイと日本を比べる」。自分たちの住むタイについて、タイの問題について考える。全体学習として『みんなの日本語 初級 I』（12 課）の比較の文法の復習。作文は個別指導。時間中にかけてなければ宿題。

### 実践① ビジネス日本語学科 1 年生「聴解会話 2」（3 月 12 日（火））

- ・対象学生数 21 名 出席 18 名 欠席 3 名
- ・実習内容 教案より

学習項目

- ・自己紹介をする。
  - ・学校名、氏名を言う。
  - ・学校名、氏名を聞く。
  - ・名前カードを作る。

学習目標

- ①自分についての情報を日本人に伝わるように言えること。
  - ・「チャンカセーム・ラチャパット大学」という大学名を相手に伝わるように言える。
  - ・自分の名前を日本人に伝わるように言える。
- ②相手が言った情報を聞き取り、正しくリピートできること。
  - ・相手が言った「鳴門教育大学」という大学名を聞き取って正しくリピートできる。
  - ・相手の名前を聞き取って正しくリピートできる。
- ③相手の質問に対して適切に応答できること。
  - ・質問内容を聞き取って適切に応答できる。

- ・わからないことがあった場合に適切に聞き返せる。

#### ④相手に質問する。

- ・それをできるように練習して考える。
- ・最終目標 日本人に自己紹介をして会話する。
- ・授業の流れ

学習目標①から④まで PPT を使いながら進めた。途中、学生たちが発音しにくい単語は繰り返し練習した。終盤日本人への質問をする頃には、学生たちが乗り出すようにしていたのを見て、日本人と会話をしようとする意思を感じた。そのため、山本と一対一で会話をするより、一人でも多くの学生が日本人との会話を楽しめるように、日本人 3 人の協力を得て質問に答えた。

積極性のあるクラスで、学生たちはロールプレイや質問に活発に参加した。高校までに既習歴がない学生もわからないことについて質問をした。おかげで、指示がわからず、答えられないままという学生はいなかった。

- ・実践内容の反省点
  - ・授業時間が 2 時間半。未経験の長時間である。学生の集中力が心配されたが、私自身の集中力に問題があった。後半、時間と言葉のコントロールが甘くなっていた。
  - ・最終目標であった、山本と一対一で自己紹介しあうという活動が完成できなかった。
  - ・教室の机の配置間隔が狭いこともあったが、学生との距離が近すぎた。距離が近いということは、ほかの学生に背を向けることになり、クラスがざわつく原因になった。
  - ・予想外の事態への対応

授業終盤 100 分の時点で学生のパーヌマートさんがタイのお菓子を提供してくれた。学生が日本人に質問する中で彼女は「甘いお菓子を食べていいですか？」とタイのお菓子を出した。会話の流れに沿った提供であったことを尊重し、授業中であつたが試食した。感想を述べ、お礼を言った。お菓子に対する質問を学生にした。予想外の事態ではあつたが、生きた会話できた。

### 実践② ビジネス日本語学科 2 年生「日本語作文 2」(3 月 14 日(木))

- ・対象学生数 20 名 出席 18 名 欠席 2 名
- ・実施前情報

①作文の最終目標は、学期最終に 400 字～800 字でスピーチ原稿を作成し発表させること。学生の日本語力にはかなり差があるので、学生に合わせるが、最低でも 400 字のスピーチ原稿を書くこと。日本に行った経験がある学生 2 名、N4 合格者 1 名。日本語の習得能力にばらつきがあり「〇〇は××より～です」の様な作文を書く学生が多いと予想される。授業は学生に書かせたものを個人的に指導していく。手本の作文を

渡してしまうと、それをまねて書いてしまう。

(以上、CRU 井尻史子先生より)

②実習前3月7日木曜日 「日本語作文2」の授業(学外講師の「五行歌を作成する」)  
を見学

3月11日月曜日 「聴解会話4」の授業(実習生井上)を見学

これらの情報をもとに、どこに焦点を置くか前日まで悩んだ。作文は書けなかった場合宿題でも良いということから、クラス授業として『みんなの日本語 初級I』12課(比較表現)と、井尻先生からいただいた比較表現の基本形の復習をすることにした。そして、書く授業ではあるが、山本の比較表現を含んだ話から何を比べているのかを聞き取る練習を入れた。作文を書く参考として、また、どのくらい理解しているのか知りたかった。見学した「通訳の日本語1」の授業で、聞いた日本語の中から目的のものだけを取り出すという練習を見た。その方法を利用して学生たちが比較文を正確に理解しているかを試してみた。

・実習内容 教案より

学習項目

- ・タイと日本を比較する。
  - ・形容詞。
  - ・比較文。
  - ・作文する。

学習目標

- ・日本人の話す自然な日本語を聞いて理解できる。  
日本人がタイに来て感じたことを話す。話の中の比較文を理解できる。
- ・比較文を作ることができる。
  - (1) 二つのものを比べる
    - Aは、Bより～(です)
    - AよりBの方が～(です)
    - Aは、Bほど～ない(です)
    - AとBは、同じくらい～(です)
  - (2) 三つ以上のものを比べる
    - Aは、～の中で一番～です
    - Aは、～の中で最も～です
    - ～の中で一番～のは、Aです



～の中で最も～のは、A です

- ・ 比較の材料
  - ・ 徳島県で一番のもの 渦潮・日本で一番低い山・辛い調味料「みまから」
  - ・ 日本のお金 札と硬貨（形状の比較）
  - ・ 山本のタイの感想を聞く。
- ・ 授業の流れ
  - ・ PPT を使って基本文型の復習。
  - ・ 基本文型を使った比較文の紹介。
  - ・ 材料を使って比較文を作る。
  - ・ 比較文の発表。
  - ・ ワークシートに授業で学んだ比較文を書く。
- ・ 実践内容の反省点
  - ・ 教案のポイントを絞り込めなかった。
  - ・ 授業時間が長く、時間管理が難しかった。
  - ・ グループワークを10分間の予定が30分になってしまった。理由は二点、一つはタイマーを設定したつもりが設定できていなくてならなかった。もう一つはグループ分けで失敗した。このクラスは三つの授業を見学しており、大体グループリーダーになる学生の目星をつけていた。しかし、名札を使ってランダムに三つのグループに分けたところ、偶然にもリーダー格のいない学生のグループが一つ出来てしまった。（この点に関しては指導の井尻先生も同意。）そのグループの作業が進まず、そのグループに集中してしまった。
  - ・ 作業の指示がうまく伝わらなかった。前回「聴解会話4」（井上担当）の授業のグループ発表の時、グループ内で決まった学生しか発表していなかったので、今回は全員が発表するようにしようと、指示を出したが同じ学生が発表していた。ワークシートの書き込みをみても指示が伝わっていないことが分かった。
  - ・ ワークシートを比較文の練習後に配ったが、先に配って一つごとに記入するようにした方がよかった。
- ・ 今後に向けて
  - ・ 時間管理：授業時間が長い場合、一つの授業と考えず、休憩時間を入れて二つの授業と考え、教案も2回分に分けるなど、柔軟な発想でとらえる。
  - ・ クラス管理：実習①1年生のクラスでは学習経験が短い学生、実習②2年生のクラスでは作業の遅いグループに集中しがちであった。進行をどのレベルに合わせるかは大変難しいが、クラス全体を管理できることを今後の課題にしたい。
  - ・ 自己管理：場に流されやすく、あきらめが早い自分の性格を「目標を達成する」と

いう強い意志をもって管理する。

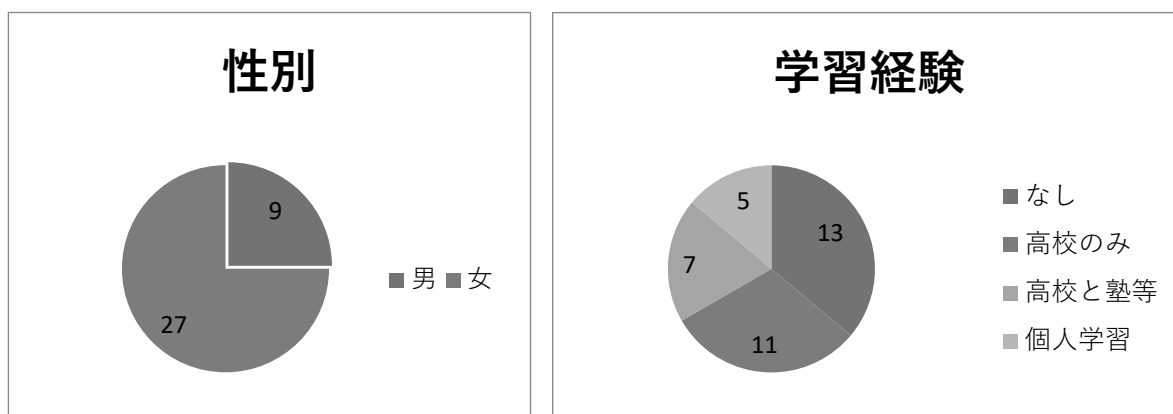
## 実習全般の感想

交流会・授業見学・実践授業すべて含めた10日間の実習は素晴らしいものだった。今回が提携前の第一回の実習であったこともあり、学長表敬訪問、副学長・ビジネス日本語科の先生方との食事会に同席させていただいた。最終日のCRU ビジネス日本語科の先生方全員参加の反省会に2時間も取っていただいた。これは実践授業に対する反省のみならず、今後のより良い実習に向けての話し合いで日本語教育の実習生を積極的に受け入れ大切に育てようという先生方の熱意を感じた。そして、日本語母語話者の私たちは日本語教育実習生であるが、鳴門教育大学の学生の代表であり、日本人の代表でもあると背負うものの大きさを感じた時間でもあった。学内実習では得られないタイでなければできない体験であった。

微笑みの国タイは単なる実習先ではなく、思い出深い国になった。異文化理解は相手の存在を認めることから始まる。非漢字圏の国の一つでしかなかった私の中のタイという国は、今では大きな関心を寄せる国になった。チャンカセーム・ラチャパット大学の皆さんが温かく迎え入れてくださったように、日本語を学ぼうとする皆さんを生涯応援したいと思う。

## 学習者の日本語学習動機の調査

アンケートは日本語とタイ人留学生の翻訳によるタイ語の併記でおこなった。  
会話1年生18人 作文2年生18人にご協力いただいた。



国際交流基金ホームページ「タイ（2016年度）」の日本語教育の実施状況 (<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2016/thailand.html>) には以下のような記載がある。

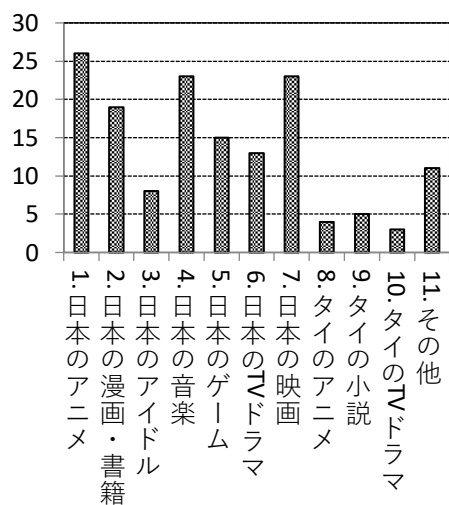
「1981年に、日本語は後期中等教育学校（高校）の第二外国語（全部で8言語）の中の1科目に加えられ、（中略）2008年7月には更に改訂版が公開された。この中で日本語は、8つの学習カテゴリー（タイ語、数学、外国語など）のうちの「外国語科目」のひとつとして位置付けられている。（中略）これら後期中等教育学校（高校）での日本語学習は①週に5コマ～7コマ程度学習する専攻コース、②週に1コマ～2コマ程度の選択科目、③テストは行わないものの単位として認定される、週に1回程度学ぶ日本語クラブの3つの形態があり、前期中等教育学校（中学）では、多くが上記の②選択科目か③日本語クラブのいずれかである。」

このことは、CRUにおける学習経験の結果にも表れている。しかし、個人の学習レベルはこれらの原因で複雑である。（合同反省会でCRUの先生方から学生の日本語力は既習歴や時間では測れないという意見が出たことにつながる）

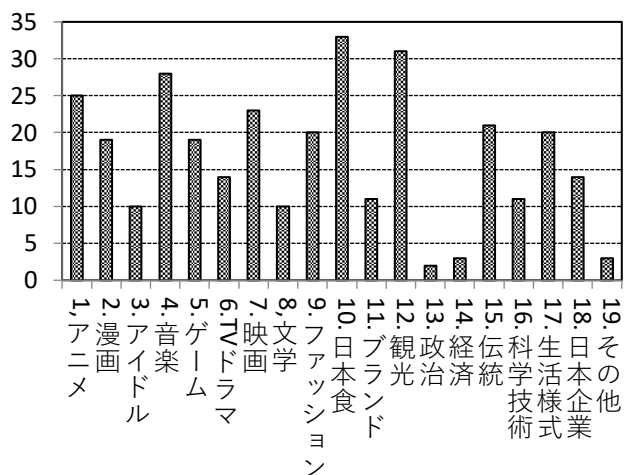
また、国際交流基金の同ページには以下のような記載がある。

「一方、2015年の日本語教育機関調査を見ると、学習目的について「マンガ・アニメ J-POP が好きだから」という回答が一番多く、「日本への観光旅行」と答えた人も大幅に増えている。学校教育以外の機関で日本語を学ぶ学習者数が、2012年に比べて70%以上伸びていることを考え合わせると、日本のポップカルチャーや観光先としての関心が学習の動機になっている場合が多いと考えられる。」

日本語に興味を持ったきっかけ



現在の日本への関心



今回の調査もおおむね、同じような結果になっている。

日本食が伸びているのは日本食が身近にあるバンコクという立地も関係しているかもしれない。また、観光についてはバンコク市内中心にある大型ショッピングモールなどで日本への旅行の広告が目をつけた。

ホテルのテレビで深夜まで日本のアニメが放映されており、同局では昼間は放映がないことに気が付いた。低年齢向けのタイ産アニメは昼間の別チャンネルで行われており、深夜まで放映されているアニメは「ナルト」「ワンピース」「ドラゴンボール」「ポケットモンスター」「名探偵コナン」などであった。アユタヤへ同行した時、男子学生が自分の発表を終えた後、「おっしゃあ～やったぜ！！」と発表の日本語よりとても上手に叫んだ。

以上の二点から、タイの大人社会からあまり歓迎されていない日本のアニメだが、CRUの学生には支持されている傾向にあることがわかる。

今回は数字だけの報告だが、引き続き、もう少し考えてみたいと思っている。



平成30年度 鳴門教育大学  
グローバル教員養成プログラム 参加報告書

日本語教育実習  
＜チャンカセーム・ラチャパット大学＞  
(タイ王国)

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科  
教科・領域教育専攻 言語系コース (英語)  
学籍番号 18813011  
氏 名 井上 育美

## 1. 実習期間

2019年3月5日(火)～15日(金)

## 2. タイに行くまでの事前準備について

鳴門教育大学側より参加したのは、引率教員2名と国際交流係職員1名、そして実習生2名の合計5名である。当日を迎えるまでの間、チャンカセーム・ラチャパット大学ビジネス日本語学科の先生方(主に井尻史子先生)と事前にメールやラインを用いて情報交換を行った。その際、関係者全員でその内容を共有するようにしたことで、質問内容等が重複せず、井尻先生に掛かってしまう負担を少しでも軽減できたのではないかと思われる。また、この方法にしていたことで、現地での実践授業に関する質問や確認のやりとりを関係者全員で共有しサポートし合えたとともに、渡航前の不安を払拭できた。

私は英語コースの専攻であるが、大学院での1年間に日本語教育に関する科目を2科目学んだ。また、鳴門教育大学の学生が課外活動として週1回学外で行っている日本語教室に携わっており、わずかながら日本語指導の経験をしてきた。しかし、この研修への参加が決定したのは出発の直前であったこともあり、プログラム開始前に十分な授業準備や予行演習を行うことができないままの渡航となった。その対策も含めて、現地での授業時に活躍すると思われる物(日本らしいもので学生へのお土産も含む)を何点か用意し持参した。

## 3 タイでの日本語教育実習について

### 3.1 授業見学

① 3月5日(火)「ガイドの日本語1」(3年生・担当:サワソニー先生)

今回の実習初となる授業参観では、ちょうどプレゼンテーションを行っていた。この授業の活動内容の一つとして、グループに分かれてそれぞれのグループが旅行会社のようにタイの77県のうちから1県を選び、その県の見どころツ

アーを提案するというものであった。

ビジネス日本語学科3年生の学生ということで、彼らの日本語力は全体的に高いと感じた。発表担当者たちには緊張感が見られたものの、人前での発表に慣れていると感じられる学生が多かった。ガイドの練習であるため、話し言葉にもきちんと注意が払われ、丁寧語を適切に用いながら行っていたことが素晴らしかった。これは、日頃から発言・発表の機会が頻繁にあることに加え、科目の到達目標に応じた適切な指導がなされていたことの表れではないだろうか。また、プレゼンテーションとともに配付された資料もグループごとに大変工夫されており、学生たちが時間を掛けて入念に準備をしてきたことが伝わった。そして何よりも、学生たちの積極的な取り組みと日本語運用能力の高さに大変刺激を受けた。

## ② 3月7日(木)「日本語作文2」(2年生・担当:井尻先生)

### ※外部講師 杉山佳久先生による五行歌の授業

普段は井尻先生が担当され、川柳等の指導をされているようであるが、この日は外部講師にバンコク五行歌の会幹事の杉山佳久先生を招かれての授業であった。またこの日は、地元のノンタブリー高校で日本語を教えている内野里美先生も授業に参加された。

「五行歌」と俳句や短歌との違いについて学習後、いくつかの作品を紹介してもらったあとで実際に学生たちは五行歌を作り、グループ内で披露・評価し合った。どの学生も身近なことに着目し、とても味のある五行歌を完成させていた。自分の内面までも見事に表現している作品も数多くあり、感銘を受けた。今回の授業では、学生たちに単に日本語の習得を目指させるのではなく、文化的側面からも「言葉」について触れさせ、考えさせることで、学生は一つ一つの言葉の意味により関心を持って学習を深めていくことができるのかもしれないと思った。また、私を含め、日本人でも俳句や川柳などは難しいという印象を持っている人が多いのではないだろうか。五行歌を作る上での制約の少なさは言葉を楽しむという点から親しみやすく、魅力的であると感じた。これは特に日本語学習者に



としては負担が少ないため、意欲的に継続した取り組みが行えると思う。ハードルは高すぎることなく、言葉の奥深さを学ぶことができる良い機会でもあったと思う。

グループ内での作品共有においても、なぜその作品が素晴らしいと思ったのか理由を述べる機会があった。この授業の中で様々な言語活動が展開されていたことも素晴らしかったと思う。

### ③ 3月7日（木）「通訳の日本語1」（3年生・担当：タワット先生）

3年生の通訳トレーニングの授業であった。ビジネス通訳を意識したトレーニングであるため、かなり高度な活動が展開されていた。この科目では、開講期間に通訳のスキルを身に付けさせるための8つの訓練項目が設定されていた。この日はその中からリピーティングとクイック・レスポンスの2つを行い、その後、ゲーム形式でまとまりのある文章のなかにある数字を聞き取る活動をした。教材で使われている音源はかなり発話スピードが速く、また、録音状態からの聞き取りにくさもあった。そして地名などの事前知識がなければきちんと聞き取れないような内容も含まれていた。その上、表現内容も教科書通りの会話だけではなく、普段のやりとりに近い表現も含まれていた。実際に通訳として働くことを想定した場合、このような場面に遭遇することは当然であるため、学生の立場に立った活動の工夫がなされていたのではないかと思う。中でも興味深かった活動は、ゲーム形式でのリスニング活動である。事前に学生が興味のある音源を自ら用意し、ディクテーションさせていたものを、数字を聞き取るリスニング教材として用いていたのだ。その音源は長さや発話の明瞭さなど様々であったが、学生たち自らが関心を寄せる内容であるだけに、ディクテーション活動もやる気を欠くことなく取り組んでいたのではないかと想像する。実際、自分の音源が授業内で取り扱われた時に見せる学生の嬉しそうな姿が印象的であった。集中力を切らすことなく、長時間の高度な活動の数々に熱心に取り組んでいる姿は現場に戻った際に私の生徒にも見習わせたいと思った。そのためには、教師が生徒の実態をしっかりと把握して、目標達成に近づくための適切な活動内容の見

極めを行うことが重要だろう。

④ 3月8日（金）「日本事情」（1年生・担当：マーリン先生）

学生たちが習得を目指す日本語とは切り離せられない「日本」について、数多くの資料を提示され、学生たちに日本についての知識と理解を深めてほしいという気持ちがよく伝わってくる内容であった。相撲などの伝統的な日本のスポーツ、歌舞伎などの伝統芸能、琴などの楽器、そして茶道と多岐に渡る内容を丁寧に説明されていた。ビデオと写真の両方をうまく使い分けて説明されていた。これは学生たちの興味・関心が高まっていただけでなく、理解の助けになっていたと思われる。日本での研修を終えて帰国されたばかりの先生であったからこそ、学生への説明には説得力が増していたとも感じられた。様々な分野から日本の紹介をされた学生たちは、たとえ興味・関心の度合いが異なるとしても、いずれかには必ず反応を示すため、周到な用意が鍵となるのではないだろうか。また、その際の資料準備では、誤解を与えることのないように、その内容をしっかりと確認しておくことが前提となるだろう。日本への強い興味・関心が言語習得へのモチベーションにつながるため、この授業の果たす役目は大きいと感じた。

以下の4点が授業参観全般を通して感じたことである。

（教師サイド）

- ① 実践の場面が多く取り入れられ、即戦力につながる授業の工夫がなされていること。
- ② 学生のモチベーション維持・向上に向けた授業の工夫がなされていること。

（複数の視覚教材の使用、実演、グループ活動への移行、生徒自らが用意した教材の使用、適当な休憩による気分転換など）

（学生サイド）

- ③ 学生の取り組みが意欲的であること（挙手、発表、質問など）。  
→「日本語をマスターして、日本語に関係する仕事に就きたい」という

## 強い気持ちの表れ

- ④ 学生の高い情報収集能力と ICT 機器活用能力（スマートフォン・パワーポイント）。

そして一つ気づいた点がある。私自身が教壇に立つときにも改めて考えていきたいことである。それは、学生間で異なる日本語能力の差と学習活動時における工夫である。どの学生も流暢に日本語を話していたが、そのレベルには差があった。また、全員での活動においては、積極的に発言する学生たちの中に埋もれてしまう消極的な学生が多くいた。「全員」が平等に発話練習の機会を持つことには無理があるのかもしれない。しかし、授業の中であまりに一部の学生にばかり発言の機会が偏ってしまうのでは、消極的な学生のレベルアップを望むことは難しくなってしまう。そのため、学生全員が可能な限りバランスよく学習活動を行えるような工夫をしていくことが重要ではないかと感じた。例えば、日本語が得意な学生に日本語が苦手な学生をサポートする立場に立ってもらいなどして活躍してもらいことで、双方がそれぞれ達成感を得ることができるかもしれない。

## 3.2 授業実践

### 1 回目の授業実践 ビジネス日本語学科 2 年生「会話 4」

(3月11日(月) 1限)	学生数 16名 初級後半
導入	ウォームアップ(ゲーム)
展開	「良いコミュニケーションとは」 キーワードの確認と場面ごとの会話練習(グループ) および全体発表
まとめ	本時の学習内容の振り返り

授業開始後にまずは自己紹介をし、お土産として学生に渡した折り鶴や5円玉の意味について説明をした。その後、4グループに分かれてウォームアップゲーム(伝言ゲーム)を行った。学生たちは日本語のことわざについてはあまり学習していないかもしれないと考え、それを言語材料にした。つまり、新しい言葉

の学習も兼ねたゲームにしたつもりである。時間の都合で1回しか行えなかったが、学生たちはとても楽しんでいただけたと思う。ゲーム自体だけでなく、日本のことわざを学ぶ楽しさを感じてくれた学生もいたようである。そしていよいよ本題の授業である。「良いコミュニケーションとは」について講義形式で話をしたあと、その学習内容を確認する意味で、設定された場面における会話練習をグループ単位で実施した。この活動からは、もう一人の実習生である山本さんや引率教員の廣田先生、国際交流係の大西係長、そして井尻先生にも学生グループ支援に加わっていただき、タイの学生が会話を組み立てる上でのヘルプをしていただいたり言葉選びや発音指導などもしていただいたりした。グループごとの練習後には学生にクラス全体の前でプレゼンテーションをしてもらい、各グループの取り組みを共有してもらった。グループによって場面設定やその会話の展開の仕方などが様々で大変興味深かった。しかしこれは、裏を返せば、私の活動内容の指示が曖昧であったことが要因として挙げられる。そのため、全体での共有後に学生に提示しようとして私が事前に用意していた各場面でのやり取り例は、あるグループの発表よりもシンプルなものになっていた。多くの点で至らないことが多く、また2時間半という長い授業時間で休憩時間を取らなかったにも関わらず、学生たちは集中力をほとんど切らすことなく積極的に取り組んでくれた。授業後のアンケートにも快く協力してもらい、初回の授業実践を振り返ることができた。



(批評会参加者からの意見・質問等)

### 1 教材と話し言葉との一致の心掛け

授業で私が使用したプレゼンテーション資料の中の文字と、授業中に私が実際に発話した言葉が一部一致しない点があり、学生によっては混乱していたかもしれない、とのご意見をいただいた。疑問点を抱えたまま学生が授業について来られなくなるケースも考えられるとのご意見に、そのあたりの配慮が全く足りていなかったことを自覚した。教師が自分の母語を外国人に教えるという状況では十分配慮すべき点であると実感した。このことは、話し言葉と書き言葉、丁寧語、方言、といったことにも関係してくるように思える。日本語の難しさをこのような形で実感した。

### 2 学習内容の精選

「良いコミュニケーションとは」として挙げていたものが10項目と多く、学生には難しかったのではないかと、もう少しシンプルにした方が伝わりやすかったのではないかと、とのご意見をいただいた。確かに、授業のメイン活動として行ったグループワークでは、先生方からの要望にあったように、日本語を使う機会を多く持たせることに重点を置いていた。説明した全ての項目を反映させることをグループワークの一番の目的にはしていなかったことを考えると、思い切って学習項目を絞った方が、学生には理解しやすく、より効果的な活動につながったと思う。

### 3 授業内容検討の捉え方

今回のようなスポット的な授業であれば、学習内容レベルをあまり強く意識し過ぎなくてもよいのでは、とのご意見をいただいた。この意見には、賛成する一方で、捉え方によっては難しいようにも思う。つまり、スポット的であれ、実習という視点から考えると、本来は、評価規準を設定した上での学習内容の精選、授業の展開の検討は重要であると感じるからである。うまくバランスのとれた内容にすることが望ましいかもしれない。

#### 4 学習内容の振り返りの意義

授業の終わりに「本日の授業の振り返り」を行ったことで、学生たちにその日の学習内容を確認させることができる、とのご意見をいただきました。これはまた、この日の学習内容の定着にもつながりうるし、教師がどのような目的や意図でその日の授業を計画し行ったのかも伝わると思う。今後も意識していきたい。

#### 5 学生との関係づくり

16名の学生のうち、一部とはいえ名前を覚えて呼び掛けながら接していたことで、学生との信頼関係が築かれ、スムーズに授業が展開できたところがあったように思う、とのご感想をいただきました。これは日頃私が教師として教壇に立つときに心掛けている点である。短い実習期間で学生全員の名前を覚えることはできなかったものの、学生の立場に立って考えるとき、やはりこれは嬉しいことであると想像できる。今後も引き続き大切にしたい点である。

#### (自評)

授業実践を行うにあたり、私はタワット先生（学科長）や井尻先生から「日常先生が使う日本語をできるだけ多く学生に聞かせてほしい」という要望を受けていた。このことにより、それほど日本語の文法にこだわりすぎずに授業計画を行った。しかし、これを自分に都合良く捉えるだけでなく、深く考えれば、指導上外せない文法のポイントはあったはずだろう。その点をもう少し意識する必要があったと反省した。2時間半という長時間に渡ってきちんと授業ができるだろうか、うまく学生と関わることができるだろうか、とかなり不安な気持ちで臨んだ授業であったが、ほとんど緊張せず、学生とのやりとりも楽しむことができた。これは、グループワークで他の日本人の方々にも協力していただけたことにより、私はリラックスして授業を進めることができたことが大きい。このやり方は良かったと思う。協力してくださった先生方に感謝したい。

2回目の授業実践 観光学科2年生「観光の日本語1」

(3月14日(木)3限) 学生数13名 初級

導入	自己紹介を聞いて質問に答える 自己紹介をする
展開①	日本語に触れる (学習内容確認としてのゲーム)
展開②	既習文法項目の復習
まとめ	本時の学習内容の振り返り

普段の授業で使用している『みんなの日本語 初級I』について、既習の8課をベースにした言語活動を多く取り入れた授業を計画した。

まずは授業者である私の自己紹介で日本語を聞かせ、その内容が理解できているかを質問形式で学生に尋ねた。その後は、学生たち自身で一定のフォーマットに自分自身のことについて該当する語句を入れる形式の自己紹介をしてもらった。私の説明のなかに難解な単語があったようではあるが、どの学生もうまく自己紹介ができていた。

その後2つのゲームを行った。ひらがなを並べ替えて単語を作るゲームでは、イラストを参考にさせながら答えを導く方法のものと、イラストなしのものをそれぞれ用意した。学生はすぐにゲームのやり方を理解してくれた。また、興味をもって取り組んでくれ、準備していた単語全てをすぐにやり終えてしまった。

二つ目のゲームは伝言ゲームである。ビジネス日本語学科2年生の「会話4」の授業でも行ったゲームである。4つのグループに分かれ、人数調整のため、日本人参加者にも協力していただいて実施した。『みんなの日本語 初級I』8課での既習内容となる一文(列ごとで別のものにした)を暗記してもらい、それが正しく伝わるのか、そして正しく文字にできるのかを着席している机の列ごとでグループを作り競いあった。ひらがなを読むことが難しい学生もいるような状況でのこの活動は難しいと思われる場面もあったが、どの生徒も興奮しながら取り組んでくれた。

ゲーム後は、既習文法事項の復習を簡単に行うとともに、今日の活動で扱われていた日本語の文が既習事項だということを伝えた。活動ごとに全員で一斉読みを行い、発音練習もした。最後に授業の振り返りを行い、授業に関するアンケートに協力してもらった。

(批評会参加者からの意見・質問等)

### 1 初めての日本人教師

今回の私の授業が、観光学科の学生にとって、初めて受ける日本人による授業であったとのことである。驚きと申し訳なさでいっぱいである。しかし同時に光栄にも感じた。私が何を話しているのかが難しすぎたために、先に発言し終えた学生と同じ内容を自分の発表にしていた学生がいたと教えていただいた。失敗をするのがいやだから、その場をしのごうとしていたようである。また、あまりに授業内容が分からないために、学生は緊張していたが、ゲームあたりから楽しく活動ができていたと担当教師よりコメントをいただいた。伝言ゲームも並べ替えゲームも、今後の授業で参考にできる活動であると話していただいた。

### 2 教材の効果的な使い方

今回の授業では、『みんなの日本語 初級Ⅰ』のテキストの効果的な使用方法についてもご意見をいただくことができた。それは、索引の利用である。授業中に説明で使った単語が分からない様子の学生に対して、索引からその単語を調べさせることにより、その意味を理解させつつ既習事項であったという確認もさせられる。もし個人レベルでの学習でこれが定着すれば、学習意欲の向上にもつながることはもちろん、日本語力のアップにもなる。テキストの上手な利用方法についても十分に確認しておくべきであった。

### 3 積極的に伝える方法を考える

また、英語を使った授業も可能であったかもしれないのご意見をいただい



た。これは、日本語の単語が理解できなかった学生に対して、その単語に相当する英単語を用いることで学生に伝わったのでは、というご意見であった。事前情報として、学生たちは英語をほとんど分からないと聞いていたために、その試みさえ全く思い付かなかった。より良いコミュニケーションのためには、躊躇せず、もっと積極的に方法を模索し、取り組んでみるべきだということを教わった。

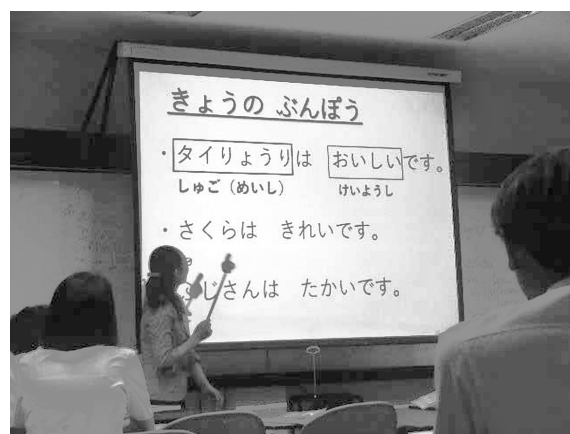
#### (自評)

事前にこのクラスの授業観察をすることなく、いきなりの授業実践であったので、非常に不安であった。授業担当者より、事前に、学生たちの日本語は初級レベルであると伺っていた。1回目の授業実践時よりもかなりゆっくりと話したつもりであったが、実際に学生の前に立ち、授業を始めると、注意していたつもりでも話す日本語のスピードがかなり速くなっていたように思う。また、使用語彙についても、私が思っている以上に学生にとって難解なものが多かったようである。双方のスムーズなやり取りがしばらく行えず、私は大いに当惑してしまった。コミュニケーションがとれないとはこのようなことを言うのだ、と改めて感じた瞬間であった。しかし、学生たちは熱心に耳を傾けてくれていた。難解な単語が多くあったようではあるが、どの学生も上手に自己紹介ができていた。そして、初めてするゲームに積極的に取り組んで楽しんでくれたことがよかった。実際のアンケートでもゲームが楽しかったとほとんどの学生が回答していた。

このクラスでも、細かい文法指導というよりは、日本語を多く聞いて発音すること、そして日常の日本語を聞かせることを念頭に置いて授業を計画した。しかし対初級学習者ということで、私の授業の捉え方および準備が不十分であったと思う。実際、私の話す内容が全くといってよいほど伝わっていないことが容易に分かる学生の反応に戸惑いを隠せなかった。そのような場面でいかに教師が落ち着いて柔軟に対応するかで授業の展開が変わってくるだろう。幸い、比較的日本語が分かっている学生が数名おり、その学生を中心にして活動を進めるようにしたことで、学生全体が協力しあいながら学習できていたと思う。とは言え、今回の授業を通して、初級学習者に対してはやはり「簡潔さ」がキーワードとな

りうると感じた。これは苦手とするところである。注意したい。

これほどまでに戸惑いを感じながら進める授業は初めてであったが、ゲーム等を通して学生と私との距離が縮んできたと実感できる場面が徐々に増え、楽しく授業を終えることができたのはよかった。



#### 【タイでの日本語教育実習全般を通しての振り返り】

今回私は大学院生として、また、高校の英語教師という立場で参加させていただいた。日頃は日本で英語（第二言語）を学ぶ日本人の生徒を相手にしているため、タイで日本語（第二言語）を学ぶタイ人学生と接する機会を与えられたという意味では、扱う言語が異なるだけで同じ状況下で教師として教壇に立つことで、これまでと同様に感じたことだけでなく、新たに気づくことができたこともあった。将来日本語のガイドや通訳になりたい、などの明確な目標を持っている学生が多数であったこと、そして大学に入って日本語学習を始めたという学生でもかなりの日本語のスキルを身に付けていたことなどはかなり印象的である。日本で私が普段接している生徒と比べると比較できないほど高いモチベーションを持って授業に臨んでいると感じた。そして、そのような志の高い学生を指導する教師陣の指導力も、学生に注がれる愛情あふれたまなざしも素晴らしかった。具体例を挙げるとすれば、チャンカセーム・ラチャパット大学は決して裕福な学生が多いとは言えない状況のようであるが、そのような状況にあって、高い学力があり、将来の活躍も有望視される学生ながら、家庭の事情のためにそれに

反比例する日本への留学のチャンスをいかに実現させてあげられるのか、ということを経験から考え、探り、熱く語られる先生方を目の当たりにすることが多かったのだ。授業もそうである。どの先生も長い講義時間をうまく工夫して授業内容を考えられ、熱心に指導しておられる姿に感服した。

今回、私自身が実習させていただいた授業も一コマの時間が長く、その授業時間はそれぞれ 150 分と 120 分であった。現職教員として普段高校の教壇に立つときは一コマ 50 分である。そのため、授業を計画する上で、一コマの授業での学習量の設定と各活動の時間配分など、見通しを持って準備を進めることに大変苦労した。事前に得ていた情報からもう少し準備や心づもりが必要であった。

実習の途中には疲れを感じることもあったが、振り返ってみると、私はこの 2 週間という実習期間は適当な長さであったと思っている。一コマの時間の長さに驚きは隠せなかったが、いざ授業をしていると、緊張感も手伝ってか、それほど長く感じなかったというのが正直な感想である。学生たちは私の拙い授業に対しても嫌な顔を見せることなく、ついてきてくれていたからこそ、私も授業を楽しむことができていたのだと思う。そして先述したように、何よりも彼らのやる気に満ちた学習態度は感心するものであった。

日頃日本の高校で「外国語」である「英語」を教える身である私は、今回の実習を通して異文化体験をしながら自分の「母語」である「日本語」を教えるという貴重な機会を得ることとなった。そのなかでも私は井尻先生の「日本語母語話者」としての役割と、タイ人の日本語教師の先生方の「非母語話者」による「第二外国語」指導の役割といった点にも興味を持った。つまり、これは日本における日本人英語教師と ALT との立場に置き換えられる。学生に協力してもらったアンケート結果から、指導を希望する分野が教師の属性によりかなり明確に分かれていた。つまり、文法・知識面と実践面である。今後現場に戻った際は、これらを意識して授業を考えていきたいと思う。そのほかにも日本語教育実習をしながらその言語を英語に置き換えて考えることがあった。例えば適切な話し方や話すスピード、文字での提示方法などである。これらを意識して今後の授業計画・実践に繋げたい。

私はこれまでの海外経験のほとんどが英語でやり取りを行える場所であった。今回の実習先となったタイ王国は大学の立地的なものもあってか、英語だけでは十分なやり取りが行えない場面が多々あり、私はコミュニケーションをとることの難しさやもどかしさを久々に感じた。しかしこれは、考え方を変えると、それだけ外国語学習（その土地の言語）の大切さを改めて知るきっかけとなったとともに、言葉だけではなく、人と人の心が通じあう関係づくりの意味や重要性、そして「相手に伝えたい、相手のことを理解したい」という気持ちを持つことといった部分についても考えることのできる良い機会になったと思う。

実習中のあらゆる場面において、日本語指導の知識がほとんどない私に対して寛容かつ丁寧に細かくご指導いただいた周囲の方々に対し、感謝の気持ちを伝えたい。非常に実り多い、充実した実習となった。

平成 30 年度 鳴門教育大学  
グローバル教員養成プログラム報告書

日本語教育実習  
<チャンカセーム・ラチャパット大学>  
(タイ王国)

発行 令和元年 6 月  
編集・発行 鳴門教育大学  
〒772-8502  
徳島県鳴門市鳴門町高島字中島 748  
印刷 協徳島印刷センター

